『ノルウェイの森』のワタナベの愛のゆくえ

—三者関係の構図から見て—

葉麦 / Ling Yeh

淡江大學日本語文學系所 碩士班

The graduate student of department of Japanese, Tamkang University

【摘要】

如同許多先行研究指出，村上春樹的『挪威的森林』是以「沒有愛」爲前提的「戀愛小說」。再者，作中提到死亡的部分更多於戀愛的描寫。如此一來，敘述者渡邊所感受到的戀愛到底是甚麼呢？渡邊早已知道自己與直子之間沒有愛情的存在，他所感受到的戀愛可說是透過敘述『挪威的森林』來體認到自己對綠的愛。於是，從渡邊確認自己對綠的愛情的過程來看，確實『挪威的森林』可以說是一部「戀愛小說」。

【關鍵詞】

村上春樹、『挪威的森林』、戀愛小說、敘述

【Abstract】

As many precedence researches pointed out, Haruki Murakami's "Norwegian Wood" is the "love story" on condition of "the absence of love." Furthermore, there are more portions involving death than the depiction to love. Thus, what thing is really the love which Watanabe of the narrator felt for "Norwegian Wood"? The love which Watanabe who already got to know that Naoko had not loved each other felt is the love to the green confirmed through "Norwegian Wood." Thus, it can be said that "Norwegian Wood" will be a "love story" to be sure in a sense if Watanabe says in the process which confirms the love to green.

【Keywords】

Haruki Murakami, "Norwegian Wood", love story, narration

1　はじめに

『ノルウェイの森』は語り手のワタナベが 37 歳の時、19 歳から 20 歳の 2 年間の出来事を中心に回想した物語である。川村湊が『ノルウェイの森』を「副次的な三角関係までをも含めれば、この作品は、無数の三角形がジグソーパズルのようにはめ込まれた小説」[1]だと見ているように、作中には確かに多くの三者関係[2]、たとえば「ワタナベ・直子・キズキ」、「ワタナベ・直子・緑」、「ワタナベ・直子・レイコ」、「ワタナベ・緑の恋人・緑」、「ワタナベ・永沢・ハツミ」が仕込まれている。しかし、その中で加藤典洋が『ノルウェイの森』を「語り手でまた主人公でもある僕（ワタナベ・トオル/原文のまま）と、直子、小林緑という三人の主要な登場人物がいる。（中略）ふつうに考えれば、これはこの三人の関係を描く三角関係の恋愛小説」[3]と論じているように、『ノルウェイの森』は「ワタナベ・直子・緑」の三角関係を中心にした恋愛小説だと考えられる。作中の「ワタナベ・直子・緑」の三角関係を他の関連のある三者関係と絡み合わせて見ると、細部に入りすぎ、あまりにも複雑で正体を掴むことが難しくなる。

さらに、37 歳のワタナベによる自分の 18 年前の出来事に対する記憶によって語られた『ノルウェイの森』は、「ひょっとして自分は一番肝心な部分の記憶を失ってしまっているじゃないかとふと思う」というように、ワタナベの語りには不確かさがあるという可能性が仄めかされている。このように、不確かな語り、それに他の関連のある三者関係との絡み合いによって生じた「ワタナベ・直子・緑」の三者関係の全貌を把握する難しさは想像するに難くない。従って、本論文では、こういった難所を承知の上で、語り手のワタナベの語りにある不確かさを考慮しながら、恋愛小説としての『ノルウェイの森』において、ワタナベが表す「愛」の形と作中の多くの三者関係との関係を究めたいのである。

---

[1] 川村湊（1997）「〈ノルウェイの森〉で目覚めて」『群像　日本の作家26　村上春樹』小学館 p211

[2] 作田啓一（1981）『個人主義の運命』岩波書店p2-3では、三者関係とは一人を客体としてほかの二人がその人をめぐって生み出した人間関係で、三角関係が「愛を得ようとする」三者関係だと定義している。本論文では、それに準じて見ることにした。

[3] 加藤典洋（1996）『村上春樹　イエローページ』荒地出版社p115

以上のように、『ノルウェイの森』は多くの三者関係が存在しているという構造でなりなった物語である。また、「骨でもしゃぶるような気持ちで僕はこの文章を書きつづけている。直子との約束を守るためにはこうする以外に何の方法もないのだ」（p17）とあるように、『ノルウェイの森』はワタナベが直子との約束を果たすために語ったものだと看做されよう。このように、以下ではワタナベと直子との関係の変化に着眼して、二人の間に介入している第三者が二人の関係の変化に与えている関係を明らかにする。

２　「ワタナベ・直子・キズキ」の三者関係

２．１　ワタナベと直子の間に介在するキズキ

ワタナベと直子の二人の関係を論ずる前に、まずキズキに目を向けなければならない。なぜなら、ワタナベと直子が知り合ったきっかけは、ワタナベの高校時代の友人のキズキだからである。1967 年 5 月[4]に自殺して死んだキズキは直子の幼なじみの恋人である。直子は高校時代のキズキとの付き合いについて以下のように言っている。

> 私たちは普通の男女関係とはずいぶん違ってたのよ。何かどこかの部分で肉体がくっつきあっているような、そんな関係だったの。あるとき遠くに離れていても特殊な引力によってまたもとに戻ってくっついてしまうようなね。（p187）

引用文のように、直子はキズキとの関係を「肉体がくっつきあっている」と喩えて、「普通の男女関係」とは違ったと言っている。その理由は次のようである。

> 私たちは十二の歳にはキスして、十三の歳にはもうペッティングしてたの。（中略）。普通の成長期の子供たちが経験するような性の重圧とかエゴの膨脹の苦しみいたいなものを殆んど経験することなくね。（p187-188）

---

[4] 『ノルウェイの森』では「一九六九年の一月」のようなはっきりとした時間表現と、「高校二年生の春」のような時間表現が見られる。本発表で使った作中の時間は木股知史が「手記としての『ノルウェイの森』」（1992、『昭和文学研究　第24集』）で推定したものである。

これは、直子が自分とキズキとの成長期が一般の人とは違っていることを強調するくだりである。直子はキズキとの付き合いが普通ではないと主張している。そして、この時期、ワタナベの二人との付き合いは下記のようである。

> キズキが一度席をはずして二人きりになってしまうと、僕と直子はうまく話をすることができなかった。二人ともいったい何について話せばいいのかわからなかったのだ。実際、僕と直子のあいだには共通する話題なんて何ひとつとしてなかった。（p37）

引用文から分かるように、キズキがいないと、ワタナベと直子との関係は中断されてしまう。キズキは渡し船のようにワタナベを直子と繋いでいる。つまり、ワタナベと直子との関係はキズキを通して成り立った関係なのである。また、直子は「彼（キズキ・筆者注）以外の人になんて殆んど興味すら持てなかったのよ」とも言っている。直子はキズキ以外の人に興味さえ持てなかったから、他人を愛することもできなかったであろう。このように、高校時代キズキ一人しか愛していなかった直子は、キズキを通してのみワタナベと繋がっていたのである。

1968 年 5 月、東京の大学生になったワタナベは偶然に直子と出会った。その後、定期的にデートすることになった。二人の関係は高校時代とは違うようになったが、二人の間にはやはりキズキが存在している。

> 秋が終り冷たい風が町を吹き抜けるようになると、彼女は時々僕の腕に体を寄せた。（中略）彼女の求めているのは僕の腕ではなく誰かの腕なのだ。彼女の求めているのは僕の温もりではなく誰かの温もりなのだ。（傍点は原文のまま）（p44）

引用文の如く、ワタナベと手を繋ぎながらも、直子は実は心の中で死んだキズキを求めている。そして、ワタナベにもそのことが分かっている。このように、ワタナベがキズキを通して直子と連結する関係はキズキの死後にも変わりなく続いている。では、なぜキズキを求める直子はワタナベと仲良くなって手まで繋いでいるのであろうか。その理由について直子は以下のよう

に説明している。

> キズキ君は死んでもういなくなっちゃったけれど、あなたは私と外の世界を結びつける唯一のリンクなのよ、今でも。そしてキズキ君があなたのことを好きだったように、私もあなたのことが好きなのよ。(p189)

直子がワタナベを好きになった理由はキズキがワタナベを好きだったからということにある。換言すれば、直子がワタナベと仲良くなったのはキズキに影響されたためである。このように、キズキは死んだとしても、ワタナベと直子に及ぼす影響は続いている。いわば、キズキは亡霊としてワタナベと直子との間に常に介在しているのである。

また、1969 年 4 月、直子の 20 歳の誕生日にワタナベと直子はセックスした。その後、二人はそのセックスについて、以下のように話し合っている。

> 「どうして？どうしてそんなことが起るの？だって私、キズキ君のこと本当に愛してたのよ」(直子の言葉・筆者注)
> 「そして僕のことは愛していたわけでもないのに、ということ？」(ワタナベの言葉・筆者注)
> 「ごめんさない」と直子は言った。(p165)

引用文のように、本当は直子はワタナベを愛しているからセックスしたのではない。二人がセックスしたとしても、直子は依然として心でキズキを求めているのである。そして、直子はキズキのみを愛しており、ワタナベを愛していないことをきちんとワタナベに教えた。しかし、直子が自分を愛していないと知りながらワタナベは、精神的な病気[5]にかかった直子と会うため、1969 年 10 月と 12 月の二回阿美寮へ行った。また、1970 年 2 月に、引越ししたワタナベが直子へ送った手紙には次のような一節が書かれている。

---

[5] 清水良典 (2006)『村上春樹はくせになる』朝日新聞社p139では、「直子がある『病』を抱えていることは間違いない。しかしその『病』を、作者は特定の精神疾患としてではなく、(中略) もっと広義の病として描いているように思える」と直子の病気を解釈している。

もし我々が四月から一緒に住むことができるとしたら、それがいちばん良いじゃないかなという気がします。うまくいけば君も大学に復学できるし。一緒に住むのに問題があるとしたらこの近くで君のためにアパートを探すことも可能です。いちばん大事なことは我々がいつもすぐ近くにいることができるということです。(p347)

ワタナベは直子と二人で新しい生活を始めようと努力した。だが、結局その努力は無駄であった。「直子はお前の方を選んだんだものな。彼女自身の心みたいにくらい森の奥で直子は首をくくったんだ」とあるように、1970 年 8 月に直子はキズキを求めるため、結局死を選ぶことにした。以上のような「ワタナベ・直子・キズキ」の三者関係について、高橋丁未子は以下のように論じている[6]。

「グー」をキズキ、「パー」を直子、「チョキ」を〈僕〉と設定してみよう。「パー」は「グー」に勝つ。ゲンコツは掌の中へ収まり、合体してしまう。「チョキ」である〈僕〉は、何ら作用できないのだ。

高橋の論説では、「グー」と「パー」に喩えられたキズキと直子の関係は結局、死により一緒になって、残されたワタナベにはどうしようもないものだと言える。一歩進んで言えば、「チョキ」であるワタナベは「グー」のキズキに隔てられて「パー」の直子に勝つすべはない。このように、ワタナベがいくら努力してもキズキを越えられず、結局、直子は自殺した死者のキズキのところへ赴いたのである。生きているにせよ、死んでいるにせよ、キズキはワタナベと直子との間に常に介在している存在だと言えよう。

以上、考察した結果を図 1 のようにまとめた。

図 1　ワタナベと直子との間に存在するキズキ

[6] 高橋丁未子（1990）『ハルキの国の人々』CBS・ソニー出版p19

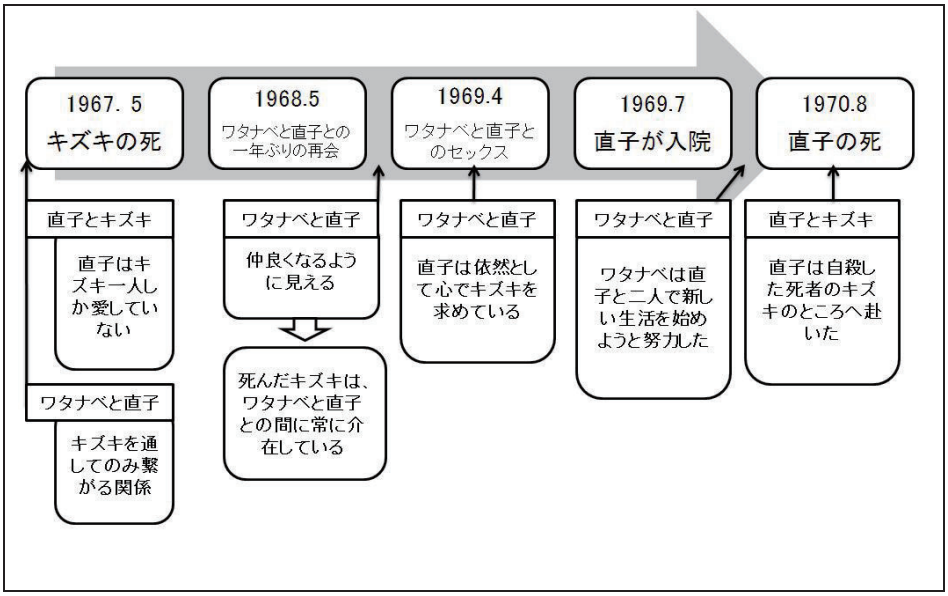


図１に示したように、直子のキズキへの愛は高校時代から死ぬまで、始終変わらないのである。直子がワタナベを愛したことは実は一度もない。そして、ワタナベ自身もそれを知っている。高校時代から、ワタナベと直子との関係はキズキを通して繋がっているものであるため、「ワタナベ・直子・キズキ」の三者関係において、キズキはワタナベと直子との間に常に介在しているのである。キズキの死後、ワタナベが直子と仲良くなったことで、このような三者関係は一見キズキの死によって崩壊したように見えるが、ワタナベがいくら直子に力を尽くしても、直子は結局愛するキズキのために死を選んだのである。このように、見かけ上、ワタナベは直子に近づいたように見えるが、裏に介在しているキズキの存在は相変わらずのままなのである。二人の距離は、本質的に何も変わらなかったと言えよう。

２．２　ワタナベの直子に対する気持ち

２．１で考察したように、ワタナベは直子が自分のことを愛していないと分かった。それを前提として、本節ではワタナベの直子に対する気持ちを見てみよう。まず、1968 年 10 月、一年ぶりに再会して仲良くなったワタナベと直子が愛について話し合った一節がある。

「これまで誰かを愛したことはないの？」と直子は訊ねた。

「ないよ」と僕は答えた。
彼女はそれ以上何も訊かなかった。(p44)

このように、誰も愛したことがないと答えたワタナベは、当然のこと、直子のことを愛するわけはない。そして、1969 年 4 月直子の誕生日の夜にセックスしたことについて、ワタナベは以下のように言っている。

その夜、僕は直子と寝た。そうすることが正しかったのかどうか、僕にはわからない。二十年近くたった今でも、やはりそれはわからない。たぶん永遠にわからないだろうと思う。でもそのときはそうする以外にどうしようもなかったのだ。(p61)

引用文のように、ワタナベは直子とのセックスについては、明確な考え方を持っておらず、ただするしかないことのように語っている。いわば、ワタナベは直子を愛しているから彼女とセックスしたわけではないのである。

また、1969 年 10 月に直子と会うため阿美寮に行ったワタナベは、そこでレイコと愛について話し合う一節がある。

「あなたにそれができる？そこまで直子のことを愛してる？」(レイコの言葉・筆者注)
「わからないですね」と僕は正直に言った。「僕にも人を愛するというのがどういうことなのか本当によくわからないんです。直子とは違った意味でね。(中略)僕と直子はお互いを救いあわなくちゃいけないし、そうする(直子を待つ・筆者注)しかお互いが救われる道はないと思います」(ワタナベの言葉・筆者注)(p170)

このように、人を愛するという意味が分からないワタナベは、直子に対する気持ちが愛だと言えるかどうかに、自信を持っていない。さらに、直子を待つことを「救う道」と言ったように、ワタナベが直子を待つのは愛に基づいたものではなく、「救い」に基づいたものである。このように、実はワタナベも直子を愛しているとは言いがたいのである。

そして、1970 年 4 月にレイコの手紙から直子の状態が悪化したことを知らされたワタナベは、死んだキズキに以下のように宣言した。

お前だってきっと辛かっただろうけど、俺だって辛いんだ。本当だよ。これというのもお前が直子を残して死んじゃったせいなんだぜ。でも俺は彼女を絶対に見捨てないよ。何故なら俺は彼女が好きだし、彼女よりは俺のほうが強いからだ。（中略）俺はもう十代の少年じゃないんだよ。俺は責任というものを感じるんだ。なあキズキ、俺はもうお前と一緒にいた頃の俺じゃないんだよ。俺はもう二十歳になったんだよ。(p356)

ワタナベが直子を見捨てないのは、一見すると彼女を好きなように見えるのだが、ワタナベの語りは「責任」という言葉に触れている。そして、ワタナベに「責任」を感じさせるのは「直子を残して死ん」だ「無責任」なキズキの存在である。このように、「直子が好きだ」というのはただ見せかけの言い方で、ワタナベのキズキに対する宣言に隠された真意は、「直子に責任を取る俺はお前より強い」ということである。それを実現するために、ワタナベは無責任なキズキと比較して、より強くあるために直子を見捨てない「責任」を取るしかない。では、なぜワタナベがキズキより強いことに執着しているのであろうか。その理由は前節で考察した「キズキがワタナベと直子との間に常に介在している」という関係に求められる。

前で考察したように、ワタナベがいくら努力しても、直子は終始キズキ一人だけを愛している。キズキを抜きにした、直子とワタナベとの関係は到底無理なことである。否応なしにこういう状況に置かれたワタナベは、男としてキズキに負けたと感じたのではないか。このような男の勝負について、石原千秋は次のように論じている[7]。

ホモソーシャルな社会を個人レベルで見ると、（中略）第一段階では女性を相手に渡す。ところが、第二段階では女性を奪い返していた。単に女性の交換をすることで絆を強め合っているだけではなく、男は女性のやりとりを介して力比べをしているのである。

以上は男性の女性をめぐる力比べをホモソーシャルの観点で解釈してい

[7] 石原千秋（2007）『謎とき　村上春樹』光文社p75-76

る論説である。さらに、石原千秋はワタナベとキズキとの力比べ、及びそれに引き込まれた直子について、以下のように述べている[8]。

> 直子をプレゼントされたワタナベトオルは、ホモソーシャル関係の中で、自分の責任を果たそうとする。ワタナベトオルが自分の責任を果たすやり方は、キズキのもとに直子を届けること、すなわち直子を自殺させることだ。

石原千秋の論説によると、ワタナベはキズキとの力比べを意識しているが、キズキに勝ちたいというほどの意欲はなく、ただ直子をキズキのもとに届ける「責任」を果たそうとしているのだという。もし石原千秋が指摘しているように、ワタナベが男の勝負に無関心だったら、ワタナベの「責任」は直子をキズキにすぐにでも返すことである。だが、ワタナベはキズキを越えて直接に直子と連結することはできない。つまり、勝負に負けたワタナベがキズキに勝ちたいという観点から見ると、「俺はもう二十歳になったんだよ」と言って自分の成長を強調するワタナベの語りには、「二十歳になった自分が十七歳で死んだキズキより強い」というニュアンスを含む可能性もあろう。このように、直子をめぐるキズキとの勝負を意識しているワタナベが言った「責任」は、直子をキズキに届けることではなく、直子を捨てて死んだ「無責任」なキズキに勝つ方法だと考えられる。

そして、1970 年 6 月に緑を愛したことに気付いたと語ったワタナベは、初めて直子への思いが「愛」であると語る一節がある。

> そして僕は直子のこともやはり愛していたのだ。どこかの過程で不思議な形に歪められた愛し方であるにはせよ、僕は間違いなく直子を愛していたし、僕の中には直子のためにかなり広い場所が手つかず保存されていたのだ。(p383)

ここではワタナベが言った「歪められた愛」に注目したい。今まで直子に対する気持ちを愛だと正面から語らず回避し続けてきたワタナベは、突然直子を愛していると言い出した。しかも、その愛を「歪められた愛」と語っている。それは実は話術であり、騙りではなかろうか。ワタナベがキズキとの

[8] 同注7　p279

勝負から感じる直子に対する責任を「歪められた愛」と言い張ったのではないか。このように、ワタナベはキズキに勝ちたいという願望を隠し、直子への「責任」を「歪められた愛」という騙りの愛として偽装しているのである。では、なぜワタナベがキズキとの勝負で「直子への愛」を言ったのであろうか。作田啓一は三者関係における模倣について以下のように論じている[9]。

> 内的媒介者の欲求を模倣する主体は、模倣しようとしている意図を自慢するどころか、それを隠そうとします。なぜ隠そうとするのか。主体は媒介者が自分より先んじて客体に接近しているので、主体は媒介者をあがめないわけには行きません。しかしまた、媒介者は主体にとって欲望の達成を妨げる決定的な障害でもあります。

以上の理論を「ワタナベ・直子・キズキ」の三者関係に当てはめると、「主体」がワタナベで、「媒介者」がキズキで、「客体」は直子である。このように、「媒介者の欲求」とは、「キズキの直子への愛」なのである。いわば、ワタナベが言った「歪められた愛」は、「キズキの直子への愛」を模倣しているものである。また、黒古一夫が『ノルウェイの森』における愛を論じる一節がある[10]。

> 作者が「恋愛小説」だと言っているのに、『ノルウェイの森』には〈愛〉が存在しないと言うのはおかしい、と思われるかもしれないが、この長編にあるのは〈愛〉ではなく、第一章で指摘したような〈優しさ〉なのではないか。例えば、次のような「僕」と「直子」の関係に果たして〈愛〉はあると言っていいのか。ここにあるのは〈優しさ〉だけではないか。

このように、黒古は『ノルウェイの森』を「恋愛小説」たらしめるものは「愛」ではなく「優しさ」だと指摘している。さらに、ワタナベと直子との関係に存在するのは、「愛」ではなく「優しさ」だと論じている。このように、愛を感じていないワタナベの直子に対する優しさは、ワタナベの感じた

---

[9] 同注2　p26

[10] 黒古一夫（2007）『村上春樹　「喪失」の物語から「転換」の物語へ』勉誠出版p115

「責任」によるものだと考えられる。

また、1970 年 9 月に、直子が死んだ後、ワタナベが再びキズキに宣言した場面にもワタナベの感じた「責任」が見られる。

> でもこの世界で、この不完全な生者の世界で、俺は直子に対して俺なりのベストを尽くしたんだよ。そして俺は直子と二人でなんとか新しい生き方をうちたてようと努力したんだよ。でもいいよ、キズキ。直子はお前にやるよ。直子はお前の方を選んだんだものな。彼女自身の心みたいにくらい森の奥で直子は首をくくったんだ。（p394）

引用文のように、直子にベストを尽くしたと語ったワタナベが、直子から感じたのは「愛」ではなく、ただの「責任」である。そして、ワタナベの努力は無駄になり、直子が死んでキズキを選んだように、ワタナベの「責任」は果たされなかった。ゆえに、「責任」を果たさなかったことで直子を介した男の力比べに負けたワタナベは、それを隠して、直子に対する「責任」を「愛」と偽装している。このように、ワタナベの直子に対する気持ちの一部は「責任」である。語りの隠蔽によって、ワタナベが感じた「責任」は「愛」と偽装されて、「騙りの愛」になったのだと言えよう。

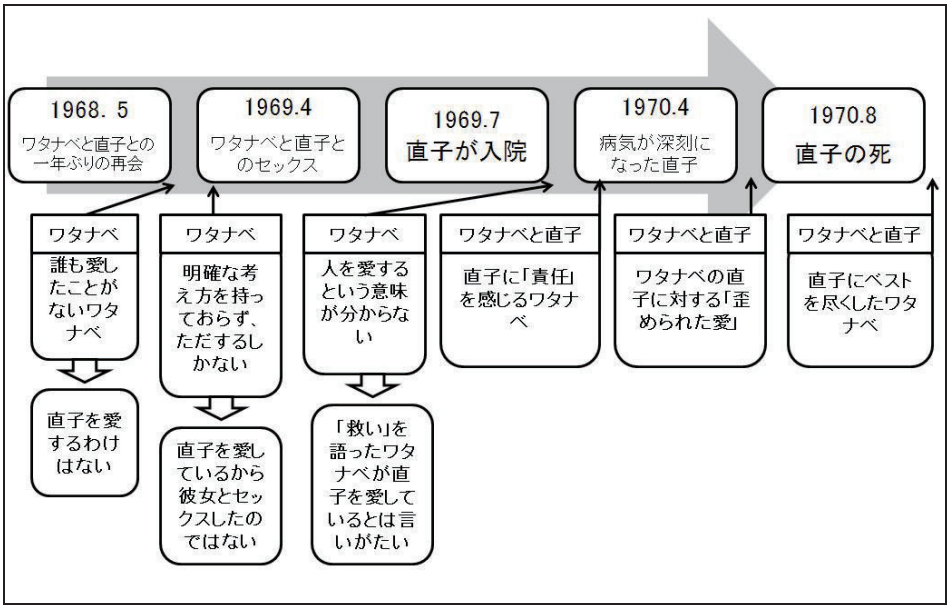
以上に考察した結果を図 2 のようにまとめた。

図 2 に示したように、ワタナベの語りで、直子への愛に触れたのは一回だけである。それまでワタナベは愛に関わる話題を逸らしている。一方、ワタナベは直子に責任を感じることをはっきり言っている。ワタナベの感じた責任はキズキと対抗することから生じたものである。ここから見て、ワタナベが一回だけ言った「歪められた愛」は、ただキズキとの勝負を意識した上で感じた責任で、愛と偽装される「騙りの愛」だと考えられる。このように、ワタナベの直子に対する気持ちは、完全に「愛」そのものというよりも、「責任」が存在していると言えよう。また、その責任は、実はキズキに勝とうとする男の勝負を隠蔽したものに過ぎない。

媒介者としてのキズキから、ワタナベが彼の直子への愛を模倣している。さらに、ワタナベがキズキを越えようとするため、直子に対して責任を感じた。このように、ワタナベが直子に対する気持ちの中に、「愛」というよりも「責任」の方が占めた割合が思いだと考えられる。語りの隠蔽によって、

「責任」が「騙りの愛」として表れている。このように、『ノルウェイの森』の表では、ワタナベの直子への気持ちはただ「愛」しか見えないが、実際に「愛」、及び「愛」と偽装された「責任」という二種に分けられる。

図 2　ワタナベの直子に対する気持ち



3　「ワタナベ・直子・緑」の三者関係

本論文の〈2〉で考察したワタナベと直子との関係を参照しながら、ワタナベのもう一人の女性、緑に対する気持ちを見たい。緑はワタナベの大学の後輩で、二人が同じ授業をとったことから知り合りになった。「僕が緑の目を見ると、緑も僕の目を見た。僕は彼女の肩を抱いて、口づけした。緑はほんの少しだけぴっくと肩を動かしたけれど、すぐにまた体の力を抜いて目を閉じた」（p117）とあるように、1969 年 9 月に、知り合った二人は間もなくキスした。それは直子が入院した後のことである。このように、ワタナベは直子のことに心が疲れて緑を好きになったように見えるが、実はそうではない。さらに、緑にキスをしたワタナベは彼女をまだ友人だと思っていない。それは、1969 年 10 月に、阿美寮にいたワタナベが直子にキズキとの友情を話すことから明らかになる。

「そしてキズキも僕にとってはたった一人の友だちだったんだよ」と僕は言った。「その前にもその後にも友だちと呼べそうな人間なんて僕にはいないんだ」（p186）

このように、自分の友だちと呼べるのはキズキ一人だけだとワタナベは言った。また、この時点でレイコがワタナベに直子への愛を確かめたとき、ワタナベが「僕にも人を愛するというのがどういうことなのか本当によくわからない」（p170）と答えている。このように、ワタナベは緑には友情も愛情も感じていなかったことが分かる。この時点では、ワタナベにとってキスした緑はただの知り合いである。

それも、同じ 1969 年 10 月にワタナベが緑の父親を看病した時に言った「僕はこの男にさっきはじめて会ったばかりだし、この男と僕を結び付けているのは緑だけで、緑と僕は「演劇史Ⅱ」で同じクラスだというだけの関係に過ぎないのだ」（p273）にも見られる。

そして、1969 年 11 月、ワタナベは「ときどき緑と会って食事をしたり、動物園にいったり、映画を見たり」するようになった。だが、1970 年 2 月にワタナベが引越しに追われて、緑のことをすっかり忘れて、彼女と三週間も連絡しなかった。それに怒った緑にワタナベは次のように感じている。

たぶん僕は傷ついただろう。それもけっこう深く傷ついただろう。何故なら僕らは恋人ではなかったけれど、ある部分ではそれ以上親密にお互いを受け入れあっていたからだ。（p349）

引用文から分かるように、ワタナベの緑に対する気持ちは恋人の持つべき感情をも超えている。そして、1970 年 4 月にワタナベが二ヵ月近く口をきかなかった緑に謝ったとき、「君は今、僕のいちばん大事な友だちだし、君を失くしたくないからね」とあるように、ワタナベは緑との関係を友達と語っている。このように、二人の関係は友人に見えるが、ワタナベの緑に対する気持ちは友情にとどまっていない。その理由は、ワタナベが再び緑を怒らせたことに後悔したときに言った言葉から判明する。

緑を失ったことで僕の生活がどれほど味気のないものになってしまったかと

思って、切ない気持ちになった。知らないうちに僕の中で彼女の存在がどんどん膨んでいたのだ。(p368)

引用の如く、緑のない生活にワタナベは孤独を感じている。なぜ、ずっと一人で毎日を送ってきたワタナベがいまさら孤独を感じたのであろうか。それはワタナベがすでに緑を愛し始めていたからである。ワタナベが緑を愛するようになった理由について、近藤裕子は以下のように説明している[11]。

緑が両親から受けた心的外傷を、直子がキズキとの共生関係とその死による心の結ぼれを、それぞれうちあける相手として「僕」を選ぶのは、彼がそれを受容し理解してくれるひとだと二人が直感しているから他ならない。

近藤が説明しているように、ワタナベが緑を選ぶのは彼女が自分の悩みを理解できる相手だからである。また、柴田勝二は、ワタナベにとって緑は「直子の精神的な病を慮りつつ、東京で親しくなり、最後には直子の死を乗り越える形で自身の思いを向ける相手」[12]だと述べている。以上の二つの先行研究から見ると、ワタナベが緑を愛するようになったことは想像するに難くない。また、前節で考察したように、直子が自分を愛していないことを知った上で、キズキとの勝負に執着したワタナベが直子に「責任」を取ると語ったのは、同じく 1970 年 4 月である。このように、直子との関係に傷つけられたワタナベの心の中で、緑の存在が大きくなるのは当然であろう。ゆえに、それはワタナベの緑への愛だと言えよう。だが、直子に対する気持ちを正直に語らず「僕に人を愛することが分からない」と言ってその話題を逸らしたワタナベには、緑を愛することを言う立場はない。というのは、ワタナベの語りには緑への愛が隠蔽されているからである。

また、1970 年 6 月にワタナベが突然緑への愛に気付いた場面では、ワタナベの語りに今まで緑への愛が隠されていた証拠が見られる。

---

[11] 近藤裕子（1998）「チーズ・ケーキのような緑の病い」『國文學　解釈と教材の研究　第43巻3号』學燈社p88

[12] 柴田勝二（2004）『〈作者〉をめぐる冒険　テクスト論を超えて』新曜社p277

僕はそれを求めていたし、彼女もそれを求めていたし、我々はもう既に愛しあっていたのだ。誰にそれを押しとどめることができるだろう？そう、僕は緑を愛していた。そして、たぶんそのことはもっと前にわかっていたはずなのだ。僕はただその結論を長いあいだ回避しつづけていただけなのだ。（p382-383）

引用文のように、ワタナベは緑を既に愛している。だが、ワタナベはそれを「回避しつづけ」たから、ワタナベの語りに当然緑への愛は見られない。が、何故ワタナベが語らなかったというと、それは直子に対して「愛」を偽装する「責任」を持っているからである。ゆえに、直子を愛していると見せようとするワタナベは、緑への「愛」を語りえない立場に追い込まれたのである。さらに、加藤典洋が「僕は直子をいわば心の中で捨て、緑を選ぶ。それは彼の中で自然な心の動きに従うものだが、しかし彼の中には、何か、罪の意識が残る」[13]と論じているように、緑を選んだことにワタナベは罪を意識した。加藤の論説によると、「自然な心の動きに従う」なら、罪を感じるはずがないと言う。だが、直子に「責任」を果たさないまま緑を選んだワタナベは罪を意識している。このように、ワタナベに罪を感じさせるのは、直子に対する「責任」にほかならない。そして、それはキズキとの関係の裏返しでもある。

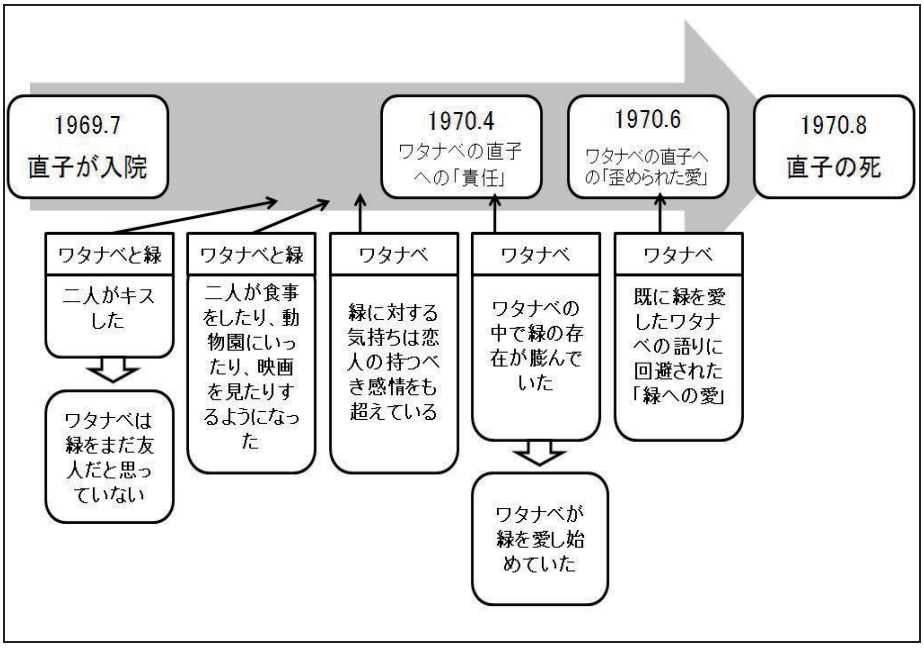
以上の結果を図３のように整理してみた。

本節で考察した結果を整理していえば、レイコに「僕にも人を愛するというのがどういうことなのか本当によくわからない」と言って直子を愛するかどうか、正直に答えなかったワタナベの緑に対する気持ちは愛ではなかった。しかし、緑と仲良くなるにつれて、ワタナベは緑に好意を感じ始め、二人が「恋人以上に親密に受け入れあった」と語るようになった。そして、直子に責任を感じると同時にワタナベにとって緑の存在が重要になった。とはいえ、今までの語りで愛に触れていないワタナベは、緑への愛を回避し続けていると語ったように、実は既に緑を愛している。だが、直子に責任を感じるワタナベの立場ではそれを語れない。ゆえに、ワタナベの語りは愛の不在ではなく、それを隠しているだけである。また、『ノルウェイの森』の冒頭で直子との約束を守るためにこの文章を書くとワタナベが語った以上、ワタナベは

[13] 同注２　p132-133

直子との約束を果たすために書いた文章に緑への愛を語る立場はそもそもなかったと言えよう。

図 3　ワタナベの緑に対する気持ち



4　おわりに

『ノルウェイの森』の単行本の帯のコピーにある「激しくて、物静かで、哀しい、一〇〇パーセントの恋愛小説」という言葉から、多くの『ノルウェイの森』に対する研究は、「恋愛小説」を前提にして発足したものである。例えば、本論文で上げた先行研究[14]に見られる、『ノルウェイの森』が「愛の不在」を前提とする「恋愛小説」だという論考は、「一〇〇パーセントの恋愛小説」から発想されたものだと考えられる。それに対して、作者の村上春樹自身が次のような見解を示している[15]。

[14]　詳細は注10を参照する。

[15]　村上春樹（1991）「自作を語る　100パーセント・リアリズムへの挑戦」『村上春樹全作品　1979～1989　⑥』講談社p9

しかし、僕はそういう小説を恋愛小説であるとして捉えたことはほとんどなかった。そして僕自身も、この本に描かれたいる様々な種類の愛は、そういう意味あいでの愛の形を越えていないと思う。だから、「『ノルウェイの森』という小説の中には本当の意味での恋愛は描かれていないから、これは恋愛小説とは呼べない」という批評を受ければ、それはまあそのとおりであろうと思う。

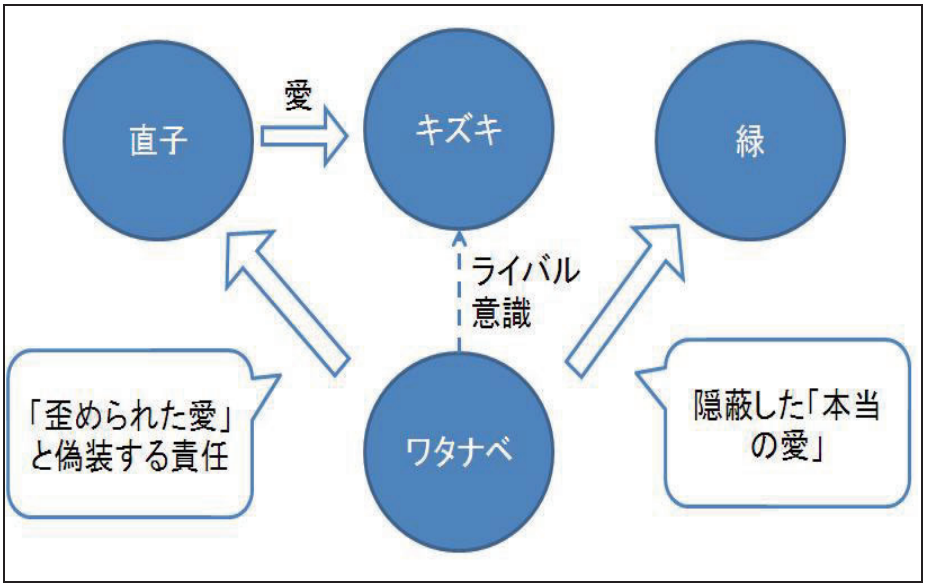
引用文から分かるように、村上春樹自身は『ノルウェイの森』を「恋愛小説」だと見ていないのである。帯のコピーに書かれた「一〇〇パーセントの恋愛小説」に影響されて、多くの先行研究では、恋愛小説という前提で『ノルウェイの森』を分析しているように、一般的に『ノルウェイの森』が「恋愛小説」として扱われている。だが、作者自身は恋愛を意識して『ノルウェイの森』を書いたのではないとはっきり言っている。かえって、村上春樹が『ノルウェイの森』で書きたい三つのことの一つは、「セックスとしについて徹底的に言及すること」[16]であるように、作中では恋人の恋愛に対する描写より、セックス、死をめぐって語る部分のほうが多い。語り手のワタナベがセックスと死が溢れている『ノルウェイの森』で感じた恋愛とは、一体どういうものなのであろうか。本論文では、ワタナベの語りを分析した上で、ワタナベの愛の行方を見出した。それを図 4 のようにまとめた。

本論文で考察したように、直子はキズキだけを愛している。そして、ワタナベは直子を愛さず、ただ責任を感じている。つまり、ワタナベと直子との間に「愛」は存在していないのである。このように、ワタナベの感じた愛は直子から生まれたものではない。また、ワタナベが告白したように、「僕は何ごとによらず文章にして書いてみないことには物事をうまく理解できないというタイプの人間」である。それを裏返しに読めば、37 歳になったワタナベは『ノルウェイの森』を通して、19 歳から 20 歳の 2 年間の出来事を理解したとも解釈されよう。ワタナベは既に直子を愛していなかったことを知ったことから、彼が感知したのは実は緑への隠され続けていた愛なのである。これは、作品の一番最後で「僕はどこでもない場所のまん中から緑を呼びつづけていた」という場面で終わることと呼応している。このように、『ノル

[16] 同注15　p7

ウェイの森』はワタナベが緑への愛を確かめる隠蔽されたプロセスにおいて言えば、確かに影の「恋愛小説」と言うことができよう。このように、作品の表にワタナベをめぐるセックスと死の場面が目立っているのに対して、裏に作者が否定している「恋愛」という主題は潜んでいるのである。作者の村上春樹が意識していないところ、『ノルウェイの森』は「恋愛小説」の性質を持っていると言える。

図 4　ワタナベの愛の行方



（＊説明　　は作品に隠れた意識を示す。　　は愛の行方を示す。）

本論文於 2009 年 4 月 15 日到稿，2009 年 10 月 27 日通過審查。

テキスト

『村上春樹全作品 1979～1989　⑥　ノルウェイの森』（1991）講談社

引用書目

作田啓一（1981）『個人主義の運命』岩波書店

高橋丁未子（1990）『ハルキの国の人々』CBS・ソニー出版

村上春樹（1991）「自作を語る　100 パーセント・リアリズムへの挑戦」『村上春樹全作品　1979～1989　⑥』講談社

木股知史（1992）「手記としての『ノルウェイの森』」『昭和文学研究』昭和文学研究会

加藤典洋（1996）『イエローページ村上春樹』荒地出版社

川村湊（1997）「〈ノルウェイの森〉で目覚めて」『群像　日本の作家 26　村上春樹』小学館

近藤裕子（1998）「チーズ・ケーキのような緑の病い」『國文學　解釈と教材の研究　第 43 巻 3 号』學燈社

柴田勝二（2004）『〈作者〉をめぐる冒険　テクスト論を超えて』新曜社

清水良典（2006）『村上春樹はくせになる』朝日新聞社

石原千秋（2007）『謎とき　村上春樹』光文社

黒古一夫（2007）『村上春樹「喪失」の物語から「転換」の物語へ』勉誠出版